

〔タイトル〕

研修医の自由選択研修期間中の履修状況と研修修了後の進路選択との関連

〔発表者・所属〕

小松 弘幸、池ノ上 克

宮崎大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター

〔抄録〕

【目的】当院の卒後臨床研修プログラムは、内科 6 か月、外科 4 か月、救急 2 か月、小児科 3 か月、産婦人科・精神科・地域保健医療のそれぞれ 1 か月を必修期間とし、残りの 6 か月を研修医の自由選択研修期間としている。今回、この選択期間の研修状況を調査し、主に研修修了後の進路選択との関連性を検討した。

【方法】対象は、2004 および 2005 年に当院プログラムで研修を開始し 2 年間の研修を修了した 62 名。選択研修先の意志決定は研修 1 年次の 9 月に行わせ、研修は 2 年次に実施した。診療科は必修 6 分野（内科、外科、救急、小児、産婦、精神）からの再選択も可能とした。

【結果】選択 6 か月間に研修医 1 人あたり平均 2.1 診療科を選択。選択された診療科は、内科 13%、救急 9%、精神科 9%など必修分野の割合が高く、麻酔科・ICUを除く非必修分野の割合は低い傾向がみられた。選択期間中の研修診療科と後期研修先として進路選択した診療科が一致していた研修医は 6 割を占めた。また、研修医の 9 割は後期研修として選択した診療科を必修あるいは選択期間中に一度は履修していた。選択期間中の選択率が低かった非必修 7 分野（耳鼻、泌尿器、眼、皮膚、脳外、整形、放射）を進路選択した研修医は全体の 16.1%で、新臨床研修制度開始前 5 年間の平均進路選択率 36.4%を大きく下回った（ $p=0.003$ 、²検定）。

【結論】研修医は 2 年間に実際研修した診療分野を修了後の進路として選択する可能性が極めて高い。逆に、研修医と能動的に接する機会が少ない非必修診療科は、研修医の進路選択率が低く、診療科偏在を是正する上でも、これらの診療科と卒後研修の関わり方を積極的に検討する必要がある。